

第四回 文芸思潮新人賞発表

文芸思潮新人賞

第四回文芸思潮新人賞に御応募くださいまして、まことにありがとうございます。今回は前回より微減の三八篇の応募数でしたが、少数精鋭と言うべく優れた作品が集まり、発想の鋭さ、また新しい視点や構想による作品が多数見られ、新人にふさわしい世界を開いてくれました。卓越した文章が目立ち、新世代の言語力を示していました。

九月末に予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な選考審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、今号は当選、優秀賞作品三篇だけを掲載させていただきます、また次号以降に順次掲載の予定です。

授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが、考慮中です。佳作以下の賞状・賞品は後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、よろしく御了承ください。

なお文芸思潮新人賞は明年も枚数、締切、審査料などほぼ同じ要領にて募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちして申し上げます。

最優秀賞

「顔」

蒼木 緑

(岩手県紫波郡)

優秀賞

「今日は生きます、でも明日は死にます」

加藤 拓

(東京都文京区)

「ホワイト・ライ」



小幡 洸貴

(富山県富山市)

奨励賞

「匿名記者アカウント」

萌乃ポトス

(群馬県桐生市)

「幽隠の終わり」

中山 喬章

(京都府京都市)

「圭と凜」

河埜 喜一

(広島県呉市)

佳作

「ある現実——散文詩風な小説」

成瀬 十八

「自然発火」

小山 鬼

「黙れ」

南崎 理沙

「Duplicate」

さんし

「なくのは女のないものねだり」

藤本 亜香莉

「手紙屋」

大吹 紫音

「不可逆的後悔史」

宇部 道路

「蟠螂」

似内

入選

「閃光」

鈴木 希寿

「瑠々々」

米井 暢成

選評

新しい発想や最近の素材

大高雅博



今回は、新しい発想や最近の素材を使つての小説が多く、それは良いのだけれど、残念ながら完成されるまでにはなっていないものも多かった。

ただ、飛び抜けた作品が二作品あり、当選作が今回出るかどうかが、僕の事前の興味だった。

当選作蒼木緑氏の「顔」は、面白い。相手の顔を見ると相手の死に顔が見えるという能力があり、伏し目で生活している。その時、彼女が現れ、顔を見ると綺麗だった。彼女は相貌失認であり、顔を顔と認識できない。ひよつとすれば、そのために、このまま、付き合えるのではないかと考える。主人公が、その人の目を見ると、死相が見える、という発想が良い。それに加えて相貌失認の彼女を出してきた発想が良い。この二つを発想できたことで、この作品

か書きえない作品で、新聞社の裏側を書くには良い手段だと思ふ。最後に向けて、もう少し、やりようがあったのではないかなとは思ふ。

さて、優秀賞の小幡洗貴氏の「ホワイト・ライ」であるが、富山を舞台にして、雰囲気もあるのだが、できるだけSF臭さを減らして、ファンタジーに徹した方が良かったような気がする。SF小説として見ると、やや雑で、浅いのではないかと思ふ。隕石型宇宙船から現れた遺骸は「古く三万年前程のヨーロッパ系の遺伝子を最後に」とあり、この宇宙人は三万年前に地球に来てかなりの人類を宇宙に運んだようであるが、まず、彼らは何故、この広大な宇宙の中で地球に来たのか地球を選んだのが、分からない。何のために人を自分たちのところに運ぶ必要があったのかが分からない。

そして、何故、遺伝子変異を繰り返して、三万年もその人達を育てのかも分からない。おそらく、地球と違う重力下では、子孫を産み育てるのは難しいと思われる。重力を操れるとしても人が生きるためにはかなりの環境を用意しなくてはならない。それも三万年もだ。合理的な理由がないと、無理だ。それから、簡単に三万年前のヨーロッパ系の遺伝子と言っているが、そこはもっと丹念に調べれば、色々材料が広がったと思う。どうも、三万年前のヨー

は成功した。第一回の新人賞の三作の質が非常に高く、中々受賞作が出なかったのだが、漸く新人賞が出たことは喜ばしい。物語としてもとてもよい。

優秀作加藤拓氏「今日は生きます、でも明日は死にます」はとても切実な話だ。不妊治療を続けてやっと、産まれた赤ん坊がNICU（新生児特定集中治療室）で幾本ものチューブにつながれベッドに横たわる。医者からは「回復の見込みがない」と言われ、中々妻に告げられない。切実な話である。赤ん坊はチューブを取り外され、亡くなるだろう。その前に妻は赤ん坊の指に触れ、温かみを感じる。惜しむらくは、あまりに枚数が少ない。だが、とても良い小説であることには間違いない。

僕の三番手は奨励賞中山喬章氏「幽穂の終わり」である。この小説の方向性は良いと思ふ。ただ、「パティローマ」や「新屋敷さん」についての、解答というか、どちらかでもいので、何か、実在を最後に示せば良かったと思ふ。伝奇小説の方だと思ふが、例えば、半村良や、昔だが、小栗虫太郎が書く小説を思い出す。小栗虫太郎は、法水麟太郎という探偵が活躍するペダンチックな「黒死館殺人事件」が有名だが、「人外魔境」「有尾人」などの伝奇小説も書いている。その辺から刺激を受けて欲しい。

奨励賞萌乃ポトス氏「匿名記者アカウント」は現代でしロップには、まだ、ネアンデルタール人がホモサピエンスと共存していた可能性がある。ネアンデルタール人はホモサピエンスよりも体が大きく、頭脳も変わらず、道具も使い、独力で獲物を仕留められたという。ホモサピエンスはその力がないので、集団で獲物を取った。歴史的に見ると力強いものが生き残るわけではない。生き残りには、かなり偶然が関わっている。日本人のDNAの中にも2%と少ないが、ネアンデルタール人の遺伝子が入っているといる。(ネアンデルタール人の遺伝子が入っていないのは、サハラ砂漠以南の人々だけという。) この小説では宇宙人が住む惑星は「生命に適した環境が一千年にも満たない」とあるが、地球で生命が誕生したのは、地球が生まれてから一〇億年以上であり、流石にその仮定は無理があるのではないか。また、二十年前に地球に来て、二十年後にまた来るというのも、無理があるように思える。

それらを満足させるとすれば、例えば非常に科学的に進み、重力を操ることができ、文明も発達したので、隕石型の宇宙船で、他の星の知的生命体を探すことにした。しかし、ほとんどが無生物の星ばかりで、あっても下等な植物がいるだけの星だった。その時、初めて知性的な生き物がいる星が地球だった。三万年前の地球に来た彼らは生命の研究を兼ねて、動植物を冷凍冬眠させ、巨大な箱型の宇宙

船（後のノアの方舟伝説となる）で彼らの住む惑星の近くの星で、重力を作用させ、それらが住める環境にして、彼らの進化を見守った。その中にネアンデルタール人や、ホモサピエンスも含まれていた。三万年の間彼らは進化し、繁栄し始めた。だが、そのエリアは手狭になり、一部を地球に戻そうとした。月の裏側に宇宙人の前線基地があり長年地球を観察していた。彼女を地球に送り、二〇年間様子を見た。そして、彼女を回収する。大雑把なものだけど、色々考えられるだろう。

隕石型の宇宙船が出てくるけど、ジャック・フィニイの「盗まれた町」では、そら豆かそんな形の宇宙船で地球に侵略に来る。全く科学的ではないが、この作品は大傑作で、全く違和感はない。確認して欲しい。アーサーCクラーク、ハインライン、ヴォークト、アシモフ、山田正紀と、いくらでもSF作家はいる。図書館に行けば、まだ置いてあるのではないかと思う。色々読んでほしい。

最後に、昔、地球から宇宙に向けて規則的な電波を発信し、地球に高度な生命体があると知らせたが、宇宙からは、これまで一度も高度な生命体からと思われる電波を受信していない。これはおかしい、とされているが、なぜ受信できないかは謎とされている。その一つの回答が、近年、最高のSF小説であろう劉慈欣の「三体」にある。非常に文

明と科学の発達した惑星に住む人々は、自分たちがそこに住んでいることを秘密にしてじっとしている。何故なら、他の惑星に住む文明人に知れば、どの程度の科学力を持っているかも分らないために、自国を守るために、すぐに攻撃され自分たちを滅ぼすだろうと思われるからだ。勿論、彼らが別の惑星に知性のある生物がいるとわかった時点で自分たちの脅威になる恐れがあり、彼らを殲滅するだろう。だから宇宙は沈黙を守っている。小説では「黒暗森林」と呼んでいる。

皆さん、先は長いし、世界は広い。考えること、想像力も限りがない。頑張ってください。

展開の充実に欠ける

八寛正大



第四回目になるこの賞、今回も感覚の鋭さや、設定のおもしろい作品はあったが、どこか二者関係の狭い世界のやり取りに終始したり、一人の独自の思弁の開陳だったり……で、展開の充実には欠けて

いる気がした……。全体を通して言えば、ライトノベル的な感覚を越えて、若いなりに作者が出逢った人生の「事件」への〈格闘のような関り〉を読みたかった（それを感じたのは一作のみ）。次回をさらに期待したい。

「顔」東北の片田舎の、それでも進学校に在籍する主人公。頭はいいようで、担任から「東大も目指せるんじゃないか」といわれ、特に気が入るわけでもなく、〈たぶんこのまま、周囲の言われるまま動くのだと思うし、実際動けるのだと思う。自発的に何かをしようということもなく、人間のあたりまえと僕のできることを律義に拾い集めていくうちに僕は大人になっていく。年をとっていく。命を使い、老いていく。〉という自意識。でも潜在的感性は鋭いちよつと内省的な高校生。で予備校にも通わず、図書委員になり、あまり人の来ない図書館を勉強の場に行っている。はじめはそのような青年の内面が描かれるのかと思った。しかしそれだけではなく、母親と目を合わせられないという設定、そして主人公は〈目を合わせた相手の死相を見てしまふ〉と。

そんな主人公が、美しく活発な女子生徒と鉢合わせをし転倒した所から、彼女との関りが始まっていく。その描写はなかなかだ。〈また、目を合わせてしまった。……僕が目から血に通じ、肌を透かして内臓の奥の奥まで、そして

細胞の一つ一つに至るまで、大地の下を流れる赤黒いマグマのようにじりじりとゆっくり、しかし確実に僕の全てを焦がさんとするような熱い眼差しだった〉と。そこから主人公と彼女との流暢な対話が展開される。結果として、〈清水さん（彼女の名前）の視点を通して僕も少しづつ今にピンとが合うようになった〉と。この世に生み出されたにも拘らず、自分の心を生み出せていない内面の自閉性が解かれようとする……その描写もなかなかいい……しかし、彼女は突然トラックに轢かれて亡くなってしまふ。感性の鋭さ、描写の良さ、にも拘らず、狭い二者関係の中で、目の合った人間は死ぬ——という主人公の閉じた固定観念的自意識の世界に落ち込み直す（予想された）ラストは……詰まらなかった。

「ホワイト・ライ」〈妻は嘘を愛する人だった。妻は美しい人だった〉と始まる出だし。さらに〈西洋の血、金髪青眼。キメ細かな白肌。濃い眉は筆先のように。高い鼻。ハート型の唇……ぷっくりした唇、嘘つく舌先は魔法の杖〉と続く。ところが障害のある子が生まれそうになり中絶、と共に離婚になる。……この展開はなんだろう、ちよつとハチャメチャな感じ。そしてどんなシチュエーション？と知りたくなる読者を前に、〈——妻は一体何者なのか。これが僕の知りたかった真相だった〉と突き放す。

一方、主人公が学生だった富山大学というのが、実名で不思議なりアリティを感じさせ、そこから話はSFの世界に入っていく。妻の父親は天文学の教授だったという設定。更にその中谷教授の論文には、飛来した隕石から、地球人類以外の知的生命体が確認されたといった。それからどんどん話は飛躍し、ついに妻は(かぐや姫のように)宇宙船で帰っていく……そこに主人公は乗り込んで再会する。で結局主人公は重傷を負いつつ地球に帰還する。

敢えて言えばまさに荒唐無稽な小説、しかしそれを受け容れて読み進めると、不思議な詩的世界の感覚が湧いて来る。……希望は前向きな嘘と言った妻の言葉や、太古の宇宙人類が詠んだ詩の中の(言葉は記号が造る嘘)とか、扉とラストにある二行詩にも、何か惹かれる。(F Masaba hook, originally) Fとはフィクションの頭文字だろうか、そして(人生は嘘の中のフック)という言葉。まだ未知数の部分を多く感じさせるが、小説というものへのある種挑戦的な姿勢は可能性を伝えてくる。

「今日は生きます、でも明日は死にます」(数多の管につながり、真っ白い布に包まれ、縮こまるような姿で横たわる赤子を、彼は見ていた)と始まる。そして(白衣を着た人間が、隣で何か言葉を発している。けれども、彼はただその赤子に繋がれた管の本数を丁寧に数えることにのみ集

見て、驚いたような顔をし、それから静かに笑った。彼は、その二つの指を、恐る恐るそっと包むように、触った。暖かかった。その暖かさが、掌の中にゆっくりと、でも確かに、広がって行った。新しい家族の、最初で最後のコミュニケーションが成り立った瞬間、それが大きな感動と共に伝わってきた。ただ、枚数も含めて、命への考察がさらにあればと思われた。

「匿名記者アカウント」 大変な労働環境の中で、精神を病んだ記者が、思い付いた奇策、匿名記者のアカウント。そのことは良く描かれ、発想も面白く現代的だ。(誰かとして、SNSの名が生きる。……いわば暗闇のトンネルで見たそれは一筋の光だった。最初は支局の誰かになりきっていたが、次第に脚色され、誇張され、自分が成りたかった理想の像をアカウントに反映して行った。いつしか、支局の誰でもない別人へアカウントは変質していった)と説かれている。ただ、その世界の空中の闘いはあるとしても、やはりリアルな人格を持つ人間同士の闘いの重さが文学のテーマであり、ヴァーチャルな世界は感動を齎しては来ない感がある。かつて多重人格ものが流行ったこともあるが、どんな人柄が増えても(病名のインフレのように)、だから何……という感じで消えて行った気もする。主体性は人格の統合にあり、命のダイナミクスもその躍動にある

中していた。……もう少しで十本になる。その最後の一本を何としても見つけようと、……ずっと探していた)。こはなかなか臨場感があり、良い出だしと感じられる。十本が数が多いかはさておき、異様な管の繋がりと解すればよく、その入り組み交ざりなどを描いたら、更に文学としての導人になったかと。生死の境をさまよう、赤子は、NICU(新生児集中治療室)にいるのだった。

その生死に翻弄される主人公の気持ちがよく描かれている、それも客観性を差し入れて。妻への告知、その母親との対応、家族というものの過去の考察、そして関わるナースとの距離……実際に経験しなければ分からないような、この見事な目があるからこそ、人間の死は支えられないのだと感じさせられる。

ラスト、(看護師は助けを求めるように、今度は彼を見つめた。しかし、彼は決してその眼を見返さなかった。妻と同じように目の前の子どもをただ見つめていた。一瞬も目を離さずに、苦しんでいるその子を、その苦しみを一瞬たりとも見逃さないように。……突然、彼の妻はそっと指でその子の顔に触れた。赤黒く紅潮し、眼は拓かれず、痛める、悩ましい偉大な顔に。そして、顔を優しくゆっくりとなぞり、その後、赤子の手にも触れた。赤子の手はそれを静かに握ろうとしたように見え、妻は、今日初めて彼を

気がする。

「圭と凜」 感覚は鋭く、孤独ゆえに繋がりの強くなった、男女の中学生。哲学的心理学的な内容も入り、考察も中学生にしては中々と思われ、この世で初めて「他者」に触れた感覚は描けている、でも人間は(その先)に広い世界が展開していくわけで……文学としては世界が狭すぎる感がある。

出て来るオールドワイズマン(老賢者)のような校長も、現実にはいない気がする。当選作の男女の出逢いと、この小説もどこか近い。(凜だけは。彼女だけは——その瞬間。そこまで考えて。僕は、気が付いた。自分に雷が落ちたような気分だ。見える景色が、変わった気がする。……だから、そのことが正しいのか確かめたくて、この動悸の正体をもっと知りたくて……)などという描写は初々しく伝わっては来るが。

「幽隠の終わり」 証券会社に勤めていた主人公が、都会を脱しての八重山紀行、そこでの体験。そして自ら民宿業を始めるに至るまで。いろいろ描かれてはいるが、いま一つドラマが感じられない。ラストの(やはり、人を変える存在は、外からやって来るものだと僕は確信した。しかも、それがいつやってくるかは誰にも分からない)というのはそうだと思われし、新屋敷も、阿頼耶識を連想させ

新人らしい発想と挑戦

五十嵐 勉

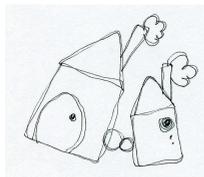


文芸思潮新人賞もこれで四回目だが、一回目は三人が最優秀賞に当選したものの、二度続けて最優秀賞が出なかったのが、今回は出て欲しいという願望があった。それに応えるように、

るが……もつと体験から得たオリジナルな考察を読みみたい気がした。

「Duplicate」交通事故で亡くなった妻の複製との対話の日々、少し冗長な感があったが、それなりに読ませた。人間の脳は、心は、それが複製だと分かった後も、日常を生きていくためにそんなツールを生み出し支えにしていくかもしれない。人間が生み出したベット、補助具、葉……写真、映像、アート……代償行為とはそれだったのではないか。(人生は嘘の中のフック)という優秀作「ホワイト・ライ」の二行詩がなぜか浮かんできた。

「蠅螂」幻想的な男女の関係、描写が幻想絵画的、(……でも私、急にムズムズしちゃって、なんだかどうしても仁科先生が食べたくて仕方がなくて、行為中なのに、変だったのよ私、本当に本当に抑えきれなくて、そうしたら驚くくらい大きな口が開いたのーそれでね、彼の頭を丸呑みしちゃった) メスの蠅螂語を翻訳した感覚か。



一つ傑出した作品があったのは、喜ばしいことだった。

蒼木緑氏の「顔」は、相手の顔に未来の死相を見てしまう奇妙な能力をめぐっての、青春風景のドラマである。若さに溢れる人生のスタート時、人の晩年の顔や人生の結末の姿のある種の畏怖とともに想像することは、人生全体への意味を問う思考として抱くのは自然だが、それを「メドゥーサの眼差し」として先鋭化させた着想は、作家の資質を感じさせる。カタストロフへと上昇させて、切り落とす最後への収斂性へ結晶させるその技術はまだ発展途上であり、削るなどかなり手を加えてもらったが、文の運び、会話の流れとテンポなど、快感を醸すものであり、天性の弾みを備えている。無論、これは高校生という舞台でこそ

可能な会話で、快さではあるが、優れた音楽に乗っていくような快適さがある。これがあるからこそ、最後の悲劇が「切り落とし」の効果として胸に深く刺さる。この美質を大事にして、社会の中でも流れる会話空間に、人間の問題、命の問題を捉え凝結していくと、真の作家になれるだろう。目標を持つということは、生きがいに繋がる。

小幡洗貴氏の「ホワイト・ライ」は、空想や想像を紡ぐ展開力がある。縮こまりがちな日常のリリズムを非日常の翔りへ大きく羽ばたかせていく広がり、筆者の創造力というべきだろう。「嘘」を起点としながら、日常をゲンゲン破っていくストーリー展開は、自由に大きく広がっていく。その飛躍力に活気がある。日本の狭い生活空間や組織に束縛されないこうした自由な羽ばたきを、自身の個性と違って、大切にしてもらいたい。こういう力が日本の沈鬱な停滞性を打ち破って広がっていき、何かの可能性を生んでいくはずで、小説などのフィクションがまずその力を発揮しないと、未来への企投にならない。大いに期待できる才能と思う。当初、私はこの作品も当選でもいいと思っていたが、選考委員の一人がSF小説を好きで、この分野の作品をたくさん読んでいることから、SF小説としての不備をうるさく突いてきたので、この作品では強く推すことを断念した。私自身は、これをあえてSF小説と見なく

てもいいのではないかと考えたが、もう一作見るのもいいかもしれないと妥協した。ただ、この小説は、前半の「嘘」を基調にした部分と、後半の宇宙人の部分とが、整合していない恨みがある。「嘘」が宇宙人までテーマとしてカバーできるか、という疑問が残る。これらを踏まえて、またぜひこの新人賞に挑戦してもらいたい。

もう一篇の優秀賞、加藤拓氏の「今日は生きます、でも明日は死にます」はその切実さが強烈である。誕生したばかりの我が子の生死を突き付けられて、命とは何か、生きるとは何か、容赦なく迫られる。この緊迫した状況によって、根源から命への問いを突きつけられるところに、このドキュメントの迫力がある。命の尊厳を、誕生の決定的時期に限って、微分拡大のような方法で、深さを呈示する、問題作である。今、この瞬間も世界のどこかで生まれていく命に対して、普遍的な状況を突き付け、無数に溢れる地球上の命が、そうした決定的な分かれ目の上に成り立っている稀有な状況の底部を思い知らせてくれる視点は貴重である。もしこれがもう少し長く、命への洞察と普遍へと広がる哲学が添えられていたら、当然当選になったと思われる。多くの人に読んでほしい作品である。

奨励賞は新人らしい斬新な分野が目をついた。「匿名記者アカウント」(萌乃ポトス)は複数のツイッター・アカ

ウントを持つ錯綜した現代の個人表現模様をうまく描き用いて、そこに浮き彫りになる組織の下の人間意識を浮き彫りにしている。新聞社という特にスピードと行動力が要求される世界で、社会表現組織によって圧迫される個人の内面の歪みと苦悩を、匿名や偽名で発散する心理運動が、ここにはよく描き出されていて、この面からも活字メディアの行き詰まりの一端が垣間見える。小説作品としての問題の抽出としては、圧迫され潰される個人の内面に留まることなく、逆にSNSによる取材や情報源の広がりによって目を向けて、その可能性や新しい問題も加味して欲しかった。このままでは潰される歪みだけがクローズアップされて、結局組織への反発にしかならない。よく考察すれば、もっと恐ろしい可能性も現れてきそうである。

「圭と凜」（河埜喜一）はデュエット形式による小説で、互いのモノローグがいい協和音を奏でていて、流れは淀みない。それぞれ孤独や自閉的な世界を抱えた者同士の交感、男女の融け合いを深めながら、恋愛と支え合いの底に眠る未来への道を確かめていく。その考察に、快い律動があり、純粹さを磨きつつ、螺旋を孤独の世界に巡らせて沈めていく。これはこれで完結し、結びは得ていて、一九才という年齢を考慮すれば、恋愛を通したその思索力は評価すべきだが、一抹の不安は残る。社会はもっと裏切りや打

に 徒勞となるかもしれない恐れを乗り越えて、前へ進んでいってもらいたい。

総じて、私は現代の若い書き手を信頼し期待している。四回の新人賞に応募された作品を読んで、文章の質の高さ、人間の問題の捉え方、積極的、実験的挑戦など、文章言語による生への切り込みを果敢に実践している。言語文化は、諸々の文化の基礎になるものである。言葉が腐れば、文化も腐る。言葉が死ねば、文明も死ぬ。その意味で、覚醒していなければならぬ近未来の危機に、この領域を鍛え、文章を通して確固とした意識を樹立しておくことは、それぞれが思っている以上にきわめて重要なことである。次回も作品を待っている。

読みごたえと出来映え

小浜清志



「今日は生きます、でも明日は死にます」加藤拓——短い枚数ではあるが、重いテーマであった。生まれてきた子供の重大な欠陥に悩む親の心情が正直に吐

算の泥沼で、この二人がそれらの汚穢からいかに純粹さを保てるか、やがて試練に立たされるのではないかと、という危惧である。それは社会という外部だけでなく、自分というものの中にも潜んでいる、変化の魔物で、これらを経たのちに到達する真の輝きを、また期待したい。

「幽隠の終わり」（中山喬章）は、沖繩の神話を現代に呼び込んだユニークな発想の小説で、現代文明への反発と批判を一貫して書いている筆者の、沖繩版と呼べる方向からのアプローチである。筆者の前回の作品「白魔術」でもそのうのだが（まだ改稿が完成していない）、提示の仕方が思いつきの領域を出ずに、表現として現代の読み手一般を動かすほどの精度に達していない。技量の成熟を待つしかないが、着想そのものは悪くない。現代の問題は、原子力発電所にしても、都会の密集した、電子機器の蜘蛛の巣生活にしる、危険や矛盾は累加している。ますます重く、巨大に広がってくる世界なので、それを相手に格闘し、精神として打ち破るのは並大抵のことではない。現代のほとんどの作家が、あまりの相手の大きさに、その怖さを認識していないのが現状で、とても表現しきることなどできない無力さを露呈している。そういう中では、蟻螂の斧に過ぎなくても、この領域を突き進んでいこうとするのは、希望が持てる。ものが大きいだけに、太刀打ちできない無力さ

露されていて読みごたえがあった。

「顔」蒼木緑——顔をまともに見えない大学受験をひかえた男の高校生を主人公にして話が展開する。顔という特別な題材をもちいたのは一種の成功ではあったが、小説としての出来映えはというと疑問は残る。しかし心に残る作品だった。

「圭と凜」河埜喜一——十九才の若さで、これだけの作品が書けるといふことに驚きを感じた。横山圭と笠井凜の二人の交換日記のような形で物語りは進むが、人間の本質を声高に叫ぶことなくさり気なく示している所など私には「人間失格」も触れている人間が透けて見える気がする。ただこの小説にはエピソードがない。もし級友の誰かが自死したという事件が起こったとしたら、この二人はどのような反応を示しただろう。またまったく違う出来事が現れたとしたらどうなっただろうと考えてしまった。二人だけの世界ではなく、もう少し他の世界も取り入れていたら作品にはもっと深みがあっただろう。

「閃光」鈴木希寿——内気で人見知りの私とは対照的に、生まれつき奔放であった妹はだからも好かれた。この二人の差は年を経るにつれ広がる。母につれられていったどの習い事も妹のようにには続けられない私はついにはこの母の子供ではないのかと空想するようになった。中学生に

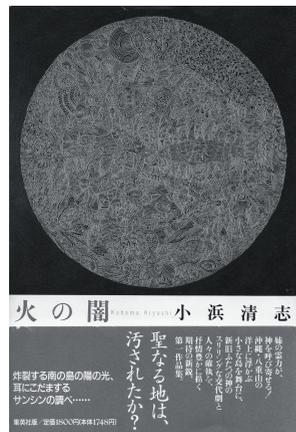
選 評

なった妹は書道で次々と表彰を受け、県の代表にもなり地元の新聞にも取りあげられるようになった。母もその知り合いも妹に贅辞を寄せる。私は耐えきれなくなつて受験勉強に打ち込むしかなかった。しかし私が高校に入学して半年たった頃から妹の変化が現われる。明るく振る舞い多くの人の羨望を集めていた妹が夜遊びを始め外泊までするようになる。母と妹のケンカは毎日のようにつづいてきた。ある夜、仲間と原付で二人乗りし、信号を無視しパトカーに追跡されていた途中に電柱にぶつかつて妹は死ぬ。妹の死は私にとって何であつたかをそれなりに表現しようとしてはいるが、未熟なままである。私と妹という対照物を書くには筆力がついていけなかつた。素材はよかつたけれどもまくサバけていない。

「Duplicate」さんし——AIが進んで行くと人間はどうなるであろう。交通事故で妻を失つた主人公が退院してからの展開にSFが現われる。GPS生活から解放されスマートフォンを操作していると妻が話しかけてくる。主人公もいつものように応える。仕事に復帰してもその会話はつづいていくのであるが、それは自分の作製したプログラムであるというタネ明しは面白い話ではあるけれど小説としてはかなりむずかしい。

「幽隠の終わり」中山喬章——私の母の生まれた島がいき

なり登場してきて興味がわき一気に読ませてもらつた。越境編、考察編、新屋敷編、と三編立てになっている。越境編で波照間での不思議な体験があり、この作品のベクトルのようなものが生まれる。そして越境編になるとそのベクトルを得るために会社を辞め、どうすれば神秘的な世界へ足を踏み入れることができるかを考えていた。十年の会社勤めでのたくわえがあるので二ヶ月ほどは図書館で本を読む耽る生活を送る。そして再び波照間島を訪れる。しかし、前回の記憶とはまったく別の事実を知らされる。そして、新屋敷編で石垣島に移住する、という話でまとまるのだが、作者は不思議な体験を小説としてまとめあげようと必死なあまり小説を忘れていた。自分の考え方を覚えてくれる存在はある日突然、外からやってくるんだという答えは決して書いてはいけなかつた。それは表現すべきもので、小説の根幹でもあるからだ。



集英社刊

第5回 文芸思潮新人賞 作品募集

文芸思潮では、新しい世代、新しい時代の小説作品を募集します。清新な感受性、斬新な発想、大胆で挑戦的な構想、画期的な文体や文章による表現など、若い世代でなければできない鋭い小説創作を期待します。社会の変化や生活の激変の底に沈む人間の声の爆発、新しい前衛的な試み、新奇の感性、海外の体験に基づく地球規模の体験など、常識を覆すパワーの小説作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容 ● オリジナルの短編小説作品。純文学に限らず、SF、エンターテインメント、歴史小説、推理小説など小説ジャンルは自由。これまで同人雑誌などに発表した作品の改作も可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格 ● 2024年4月30日時点において39歳以下の者

応募規定 ● 2万字以内。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取り、コピーを応募のこと。400字詰原稿用紙はなるべく使用しない。使用する場合はA4を用いること。

別紙に①応募部門を明記（2024第5回文芸思潮新人賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム・どちらも要ふりがな④年齢・生年月日（生年月日のないものは失格とする）・性別⑤〒住所⑥電話番号⑦職業・略歴

応募者には結果を通知する。

応募審査料 ● 2800円（郵便局の郵便為替を無記入で同封のこと）外国からは20USDドル。切手も可。郵便為替2000円+切手も可。（外国切手は不可）

応募先 ● 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」新人賞係

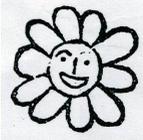
TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

賞●文芸思潮新人賞

最優秀賞 ■ 賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者2名の場合は12万円、3名の場合は10万円）

優秀賞 ■ 賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合は2万円）

奨励賞 ■ 賞状・賞メダル 佳作・入選 ■ 賞状



選考委員 ● 作家集団「塊」メンバー

締切 ● 2024年4月30日（当日消印有効）

発表 ● 予選通過者は2024年9月25日発売の「文芸思潮」93号に発表する。受賞作・優秀作は2024年12月25日発売の「文芸思潮」94号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 新しい世代による新しい小説を期待する。一見平和で、安全に蓋をされている現代の便利な生活のなかでも、噴き出している何かがあるはず。全て表面はきれいに覆われている中に、もっと暴かなければならない人間の本質的な問題が潜んでいる。それらを剔出するような新鋭の作品を期待しています。